

障害児保育における保育効果の研究 (II)

著者	鈴木 裕子, 渡邊 悌吉, 窪田 英夫, 後藤 嘉余子, 芝辻 益子, 上野 己美子
雑誌名	東京家政大学研究紀要 1 人文社会科学
巻	34
ページ	105-111
発行年	1994
出版者	東京家政大学
URL	http://id.nii.ac.jp/1653/00008888/

障害児保育における保育効果の研究 (II)

鈴木裕子*, 渡邊悌吉**, 窪田英夫***,
後藤嘉余子****, 芝辻益子*****, 上野己美子*****

(平成5年10月7日受理)

A Study on the Effect of Care in the Nursing of Handicapped Children (II)

Yuko SUZUKI*, Teikichi WATANABE**, Hideo KUBOTA***,
Kayoko GOTOH****, Masuko SIBAJUJI***** and Kimiko UENO*****

(Received October 7, 1993)

I はじめに

発達に遅れのある子どもの保育を効果的にすすめていくためには、問題に則した子どもへの対応と共に、子どもをとりまく人的環境に着目することが必要である。そして、この点に問題が認められた場合は、その調整も含めた指導が保育効果を高めるうえに必要である。多くの場合、問題をもつ子どもと周囲の大人との間では良好なかわり関係が成立しているとは言い難く、特に、言葉の遅れと人とのかわりが稀薄である子どもの場合にこの傾向は顕著である。コミュニケーションが困難であることから、母親は「かわりにくい子ども」と認識していても、主訴である言葉の遅れの問題に固執して不安や焦りを募らせており、かわりの問題についての理解が不十分な傾向がある。このため、この調整は一層の困難が予測される。母親は子どもの問題に対して不安と混乱に陥り、あきらめ、そして様々な葛藤のはてに問題の認知に至るのである。そしてその後適切な援助行動が展開されていく。

年少の子どもの指導には母親の理解と協力に基づく援助体制が不可欠であり、我々はグループ指導の中で母親に対し、入室時よりこの点を強調した指導も合わせて行っている。近年、当グループにはこのようなかわりの問題を抱え入室を希望するケースが増えてきている。そこ

* 児童学科 ITV準備室

** 小児医学 第2研究室

*** 小児医学 第1研究室

**** 児童学研究室

***** 児童学科 わかくさグループ

で、系統的な指導を確立する手がかりを得るため、言葉の遅れを主訴としながらも、人に対する関心が稀薄な子どもの事例をとり上げ、保育グループへの参加による新しい出会いや体験をとうして、子どもがどのようにかわり関係を展開させていくかを入室時、一年経過時、二年経過時と時間の経過に伴う変容過程について検討をおこなう。

II 方法

東京家政大学児童学科付属障害児通所施設(通称わかくさグループ)に平成3年2月に入室してきた女兒、I N(1歳10ヵ月)を対象とした、入室初期から定期的に保育中の行動を隣室より遠隔操作で1回1時間程度VT R録画した。後日、入室時、ほぼ1年経過時、2年経過時の行動を本児の人とのかわりを中心に転写した。この記録の中から本児の保育者や母親、及び同室の他児とのかわりについて、その程度と内容を働きかけ行動と反応行動、更には相互の関連性といった視点から整理した。

また、入室にあたって実施している医学的なチェックや個人面接の記録と遠城寺式分析的発達検査結果などによる本児の成長・発達に関する記録も資料とした。合わせて、入室時に母親より提出される生活環境調査や生育歴の記録等も資料として用いた。

III 事例の概要

対象: I. N(以下N子と記す)入室時1歳10ヵ月

主訴: 言葉が話さない 人に関心がない

家族構成: 父(40歳)母(30歳)妹(10ヵ月)

出生時体重：3790g（満期産）

出産時の問題：特になし

既往歴：特になし

発育状態：定額3ヵ月 始歩1歳3ヵ月

始語（-） 人見知り9ヵ月 指差し（-）

行動特徴：有意味語はなく、発声も少い。表情が乏しく、落ち着かず、多動である。

入室までの状況：一人で玩具で遊んだり行動することを好む。母親が近づいたり、話しかけても気がむかなければ応答しないなど、人に対する関心が薄い。自分の要求を満たすのに必要な時にだけかかわりを求めるといったマイペースな面が認められる。母親はこのようなN子への接し方がわからず、行動を強制あるいは抑制したり、叱る、放任状態でいるなど、その場限りの感情的な

対応が多い。家では「お気に入りのタオル」があり、いつも持ち歩いている。但し外出時に持ち歩くほどではない。また笑うことや泣くことも少なく感情の表出に乏しい。人が近づくと遊んでいてもずっとその場からいなくなったり、身体に触れられそうになると身をひくなど、接触・接近を避ける傾向がある。

IV 結果および考察

遠城寺式乳幼児分析的発達検査の結果から、入室時、一年経過時および二年経過時の発達状況を示したものが表1・図1である。

領域別の発達年齢とプロフィールからN子の発達特徴を概観すると、運動発達の領域では微細な運動が要求される手の運動に機分の停滞は認められたものの、ほぼ

表1 遠城寺式分析的発達検査による発達年齢

	移動運動	手の運動	基本的生活	対人関係	活 発	理 解
入室時 (1歳10ヵ月)	1 : 9	2 : 0	1 : 4	0 : 8	0 : 10	1 : 0
一年経過時 (2歳11ヵ月)	2 : 9	2 : 3	2 : 9	1 : 9	1 : 0	1 : 4
二年経過時 (3歳9ヵ月)	3 : 8	3 : 4	3 : 8	2 : 9	2 : 0	2 : 3

() 内は生活年齢

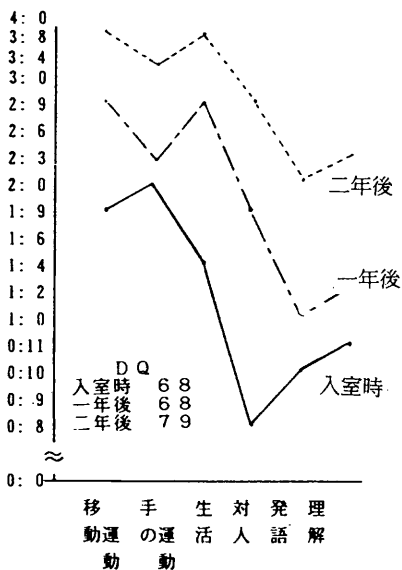


図1 遠城寺式発達検査プロフィール

順調に発達してきていると言えよう。また、基本的習慣は一年経過時での伸びが顕著であり、その後も順調に発達してきている。これは集団への参加により生活リズムが規則的になり、それが生活行動の習慣化を促進したものと推察される。また、これに関連して対人関係面の発達も見逃がせない。人とのかかわりに拒否的で行動上のやりとりも不十分な状態から、マイペースな面は残るものの人との関係がもてるようになり、人の動作に着目することや、模倣が認められる。ここに保育者や母親をはじめとする人的環境の重要性がうかがえる。そして、その後はN子なりに発達を遂げている。これらの過程から、各側面は有機的に作用し合いながら入室一年までの発達を支えてきたと言えよう。反面、主訴である言語面の発達は一年経過時までは停滞しており、その後、発声のみの段階から発語、更には二語文へと発達してきた。理解も徐々に進んできたが他の側面に比べると依然言語発達の遅れは大きい。この経過より、言語的側面はそれまでの人とのかかわりをはじめとする他の側面の発達を

土台としており、これらの条件が整ったことで二年目に発達が進められたと言える。

そこで、これらをふまえて言語をはじめ発達に影響を及ぼす一要因であるかかわりについて考えてみたいと思う。N子のかかわりの変容について、入室時、一年経過時、二年経過時をプロットして検討する。まず、かかわりの程度を対象者毎に比較したものが表2である。

表2 かかわりの変化 (%)

	×保育者		×母親		×子ども		計
	保→	N子→	母→	N子→	子→	N子→	
入室時	50.71	17.86	7.14	0	14.29	0	100.00
一年後	20.00	14.29	11.43	28.57	5.70	20.00	99.99
二年後	14.71	17.55	11.76	41.18	11.76	2.94	100.00

入室時にはN子と保育者のかかわりが殆どであり、しかも保育者の働きかけによるかかわりの成立が多い。保育者はN子の動きを良く把握していることや、N子の気持ちを汲んだ対応を心がけていたことなどから、両者間のかかわりの成立が多く認められたのではないだろうか。チャンスをとらえ積極的にN子にかかわっていった結果であろう。この保育者の的を得たかかわりは、N子からのかかわりが全て保育者に集中している点からも推察される。しかし、一年経過時にはN子と保育者、N子と母親のかかわりは同程度に成立するようになる。また、N子からの他者への働きかけによるかかわりは著しく増え、対象を拡げてきている。つまり入室後一年の間に人とかかわりは大きく展開すると共にN子の人に対する積極的態度が認められる。但し保育者との関係では依然として保育者からの働きかけによるかかわりの多い点は注目されよう。更に二年経過時には同様の傾向であるものの、N子からのかかわりは母親に集中していき、N子と母親のかかわりが最も多くなる。この一連の流れより、N子からのかかわりは対象の拡大から集約という方向性を持つことが理解される。その背景として母親を身近な存在として捉えはじめたN子の心情がうかがえる。つまり、かかわりは入室時における保育者との受身的なかかわり経験を土台に、徐々に主体的なかかわりを展開し、最も身近な母親とかかわりへと志向していく過程が理解出来る。N子のように人とかかわりが稀薄な子どもの場合、まず保育者がかかわり方のモデルを示し、くり返し提示していくこと

が必要なのであろう。その経験がN子のかかわり行動の発展を生むのである。ここに保育参加の意義が認められ、その効果が期待される。また、母親とかかわりでは、N子から働きかけのない入室時は母親からの働きかけも少い、しかしN子からの働きかけの多くなる一年経過時以降は母親の働きかけも増える傾向がある。このことは、無力感をもつ母親の場合、子どもから働きかけによって母親の働きかけ行動が触発されるといった、相互作用的關係が認められ、それが母子のかかわりを強固にしていくのであろう。母子の関わりもまた保育参加による第三者(保育者)の支援に拠るところが大きい。

一方、関わり関係を理解する上には、かかわり内容も重要な点から次にかかわりの質的な側面について検討してみたい。N子と保育者・母親・同室の他児といった対象者毎のかかわり内容を示したものが表3である。

表3 かかわり内容の変容 (%)

		N子の反応			N子からの働きかけ		
		保→	母→	子→	→保	→母	→子
入室時	受容	40.00	25.00	0	接触	60.00	0
	拒否	13.33	0	25.00	要求	20.00	0
	無関心	46.67	75.00	75.00	期待	20.00	0
一年後	受容	42.30	75.50	0	接触	40.00	54.55
	拒否	42.30	25.00	100.00	要求	20.00	9.09
	無関心	13.40	0	0	期待	40.00	36.36
二年後	受容	60.00	50.00	50.00	接触	16.67	21.43
	拒否	40.00	50.00	50.00	要求	0	14.29
	無関心	0	0	0	期待	83.33	64.28

まず、N子からの働きかけの内容は入室時、一年経過時二年経過時と、その時期によって異なる様相を示す。入室時はN子の働きかけは、保育者に対する接触行動のみである点が注目される。しかし、時間の経過に従い子どもへの接触や大人への期待を込めた働きかけが主流を占めるようになる。

また、N子の反応は入室時には保育者の援助的な働きかけに対して応答する程度で、ほとんど無関心の状態であった。しかし、次第に無関心でいることは少なくなり、働きかけられる内容によって受容と拒否を使い分けた応答へと変化していく、つまり、働きかけてくる相手や内容に応じてN子は意志ある反応をしていると言える。働きかけや応答の際に自分の行動を決定し、表現す

ることは対象を意識した行動であり、そこで多様なやりとりを経験することになる。この経験が自分と人に対する認識を高め対人行動上の発達を促すのである。これはN子の諸側面の発達に支えられる点是否めないが、実際のかかわり経験をとうして助長される側面とも言える。従ってそこに集団参加における保育効果が認められる。このようにかかわりの内的変容、言い換えれば質的变化をひき出すことが人とかかわりの未熟さを有する子どもの指導の初期目標の一つと言える。そして、このことによってその後の保育者、母親が子どもとかかわりを一層充実させていくことが期待できる。但し保育者、母親、子どもによってかかわりの質的内容が異なる点は見逃がしてはならないであろう。

次いで、N子にとってかかわりが発展的であるためには、どのような内容が求められるかという点について検討するため、N子と他者の間で成立したかかわり(働きかけ-応答)を1ユニットとしてみた場合の相互関係について、行動のエピソードを照合しながら検討する(表4、表5)。

入室時には、保育者や母親とN子の間で親和的な関係が成立しているか、多くの場合は並行的な関係にある。言語的な働きかけに対しては多くが並行的であり、否定的な反応が多い。また、N子が必要とする援助的な働きかけに即したかかわりに対しては全て受容的で親和的な二者関係が成立している。N子が受容する内容に保育者の援助行動が多いことは行動のエピソード(クレヨンをいじるN子に保育者が画用紙を渡すと受け取る)からも理解できる。入室時は、保育者は様々な配慮と意図をもってN子にかかわっている。それが必然的にN子との二者関係に反映されていると考えられる。N子の行動を視界に入れ、その時々状況を把握しながらN子が必要とする援助を提供するといったかかわりがこの時期にN子に受け入れられたのであろう。従ってN子からの働きかけにより成立するかかわりも(表3)適時性を備えた保育者にむけられてきたことは当然の結果と言える。しかし、言葉が伝達の機能を果たすまでに発達していなかったりN子との関係が不安定なこの時期では、提案をはじめとする働きかける側の都合による言語的なかかわりはN子の受容の枠を越えた課題であったと考えられる。従って並行的な関係が多く生じたのであろう。また、一年経過時では母親は不十分ながら援助的行動をN子に対しとれるようになり、関係を

深めてきた様子がうかがえる。挟の行方を追う、力づくで遊具を奪うなどの行動のエピソードからも、N子は興味のあることには注目するようになり、要求を身体で表現するなど、相手を意識した行動が目立つようになる。但しその表現の仕方は直接的でありすぎるため結果的に対立的な関係が多くなるようである。また、保育者と母親の働きかけに期待をもつようになり、N子と保育者及び母親の間で友好的な関係が多く成立するようにする。保育者はもとより母親に子どもを受け止める土壌が育ちつつある様子が推察される。避けていた身体接触にも抵抗を示さず、むしろ安心感をもって受けている様子がエピソード(母親に抱かれ保育者にくすぐられることを楽しむ)からも理解される。これらのことより、N子に人に対する緊張や警戒心が薄れてきたことがうかがえ、マイペースながらも積極的なかかわりを望んでいることが看取できる。

更に二年経過時には、保育者や母親との親和的なかかわりが増大し、ブランコへの誘いかけに応じる、ほめられて得意になる、等言語的な働きかけにもよく応じる様子がエピソードからうかがえる。声もよく出るようになり、保育者や母親とのやりとりが盛んになってきたことが理解できる。繰り返しを楽しんだり、自分に向けられる相手の行動を待てるようにもなる。つまりN子の行動は物への執着により生じる段階から、目的をもち行動する段階にまで発達してきているといえる。そして遊びやかかわりの手段として物を扱うようにもなってきた。周囲と摩擦を起こしたり、N子なりの自己主張が出てくるなど、発達的变化によるかかわり上の摩擦は認められるが、物を媒介にやりとりをする、誉められると喜ぶなど情緒面の発達が認められる。これらの諸現象から、この時期の並行的なかかわりは対応の多様性を学習するうえでは必要な過程といえる。すでに心理的拠点を有したN子は並行的な関係からの気持の立ち直りも可能であり、経験をもとに次段階へと発達をとげるものと期待できる。物や人に対する興味と関心をもとにかかわりを展開し、未熟なために生ずる摩擦を経験しながらも母親や保育者と親和的な関わりを徐々に成立させていく。そしてかかわりの主体としても客体としても、親和的な関係を成立させるようになってきたのである。

障害児保育における保育効果の研究(Ⅱ)

表4 かかわりの相互関係

(%)

成立関係	かかわり	保 × N		母 × N		子 × N							
		保 →	N →	母 →	N →	子 →	N →						
入室時	親和的	援助	33.33	接触	40.0	接近	25.0	—	—	—			
		話しかけ	6.66	要求	20.0	—	—	—	—	—			
	並行的	援助	6.66	接触	20.0	接近	25.0	—	攻撃	100.0			
		話しかけ	39.99	期待	20.0	話しかけ	50.0	—	—	—			
	提案	13.32	—	—	—	—	—	—	—				
一年経過時	親和的	身体接触	16.67	接触	40.0	援助	20.0	接触	27.27	—	接触	50.0	
		話しかけ	26.67	要求	20.0	身体接触	55.5	要求	9.09	—	—	—	
	並行的	話しかけ	39.99	期待	40.0	援助	10.0	接触	27.27	攻撃	50.0	接触	16.67
		提案	16.67	—	—	話しかけ	15.5	期待	36.36	接近	50.0	要求	33.33
二年経過時	親和的	話しかけ	40.0	接触	16.67	話しかけ	50.0	接触	21.43	接近	50.0	接触	100.00
		承認	20.0	期待	33.33	—	—	要求	14.29	—	—	—	—
	並行的	—	—	—	—	—	—	期待	35.71	—	—	—	
		提案	20.0	期待	50.00	話しかけ	50.0	期待	25.51	攻撃	50.0	—	—
	指示	20.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—		

表5 N子のかかわりのエピソード (H : 保育者 M : 母 C : 子ども)

入室時	一年経過時	二年経過時
<p>クレヨンをいじっているN子にHが画用紙を渡す。N子は「人形」を持ったままクレヨンで画用紙に描き始める。Hが話しかけるが応答しない。今度はN子がHにクレヨンを渡そうとするがHは気づかず、N子はまた描き始める。Hが「人形置いたら」と言うとN子は人形を横に置き描き続ける。再度Hが話しかけるが無関心。</p> <p>高いところに上がっていたN子がHのままで手を広げる。HはN子を抱き、室内を歩くが、N子は途中で身体を反らせる。床におろされると走り去る。</p> <p>遊んでいるN子にHが話しかけるがN子は無関心。</p> <p>玩具で遊んでいるN子の所にMが来て座る。N子は気にせずそのまま遊び続ける。Mは立ち上がり他の場所に行く。</p> <p>CがN子の持っている玩具を取ろうとするが、抵抗せず渡してしまう。</p>	<p>N子は引き出しから糊を出す。Hが気づき、引き出しの鈴やカスターネットを渡し、一緒にはいっていた挟をかたづけに行く。N子はHを目で追いながら鈴などをさわっているが糊は離さない。急に糊をはなしHが挟を閉まったところに行き、開けようとする。HがN子の好きな玩具で注意をひくがN子は無関心。扉が開かないためN子はMとHの所に駆け戻りMに抱き付く。Hに笑いかけられ抱かれたまま笑うが指しゃぶりをする。HがN子をくすぐると笑ってはいるが指は加えたままでいる。</p> <p>Nが隣室に飛び出す。MはHにN子が出ていったことを知らされ迎えに行く。N子は不満げで連れ戻される。</p> <p>Cが三輪車に乗りN子の横を通る。N子は持っていた袋を落とし三輪車に向かう。N子はCを三輪車から降ろし自分が乗ろうとするがCに後ろを押さえられる。N子はCを押して三輪車から遠ざける。Cが離れるまで押す。Cが離れるとN子は三輪車に乗り室内を走る。</p>	<p>三輪車にまたがっているN子にHが乗り方を教える。N子は嫌がり床を蹴って進みながら、N子の好きなブランコ [大人ふたりで子どもの手と足を持って振り上げる] をしている方を見る。Mが「Nちゃん、やろう」と声をかけると降りてブランコをせしめよう。ブランコが終わると三輪車に戻り、ペダルをこいで走る。</p> <p>N子が投げた風船をHが受け止める。HがN子に投げ返すとN子も受け止める。Hに「Nちゃん上手に」と褒められると、勢いよく投げ返してくる。また投げしてくれることを待つような姿勢でいる。繰り返し風船で遊ぶ。</p> <p>N子がクレヨンを出すとMが紙を持ってくる。N子が絵を描いているとCが近づき、同じ紙に絵を描き始めるN子は別の紙を持って場所を移動し、また描き始める。</p> <p>爪にクレヨンを塗っているのをMに止められるが塗り続ける。</p> <p>隣室によく飛び出すがドアの所で人が迎えに来るのを待つ。</p>

V ま と め

N子の入室時、一年経過時、二年経過時のかかわりの程度とその内容、及び相互関係について、発達検査の結果や保育中の行動等をもとに検討してきた。入室時は言語発達の遅れと人への関心の稀薄さなどの問題を持ち、母親もなす術がなく不安感のみをつのらせていた状態にあった。そこで、かかわりの調整を第一義に考え、母親とN子を共に保育の中で受容し関わっていくことに重点をおき指導を開始したところ、一年経過時点で発達のには生活習慣に伸びが認められた。基本的な生活習慣は一定の生活行動様式の獲得には違いないが、その達成は身近な大人、多くの場合は母親であるが、その人との親密なかかわり関係を土台にしているのである。この点を考慮すれば入室より一年の間に保育者の支援による母親と子どもの関係調整に成果をあげてきたことがうかがえる。また、かかわりの程度と内容においても同様であり、良らかなかわりの増加が認められる。母親にかかわりの重要性を自覚させ、行動を促す指導の必要性を強く認識させられる。更に、二年経過時では言語面にも伸びが認められる。対人関係面の新しい展開は、遊び等にも反映し、他の発達の側面と関与し発達を助長したと考えられる。N子にとって人は目的達成の手段でしかなかった段階から、人の動きを意識し興味や関心をもって関わるようになるまでに至っている。未熟さのために親和的な関係は少いものの、やがてはやりとりを楽しみ共感できる対象として人を位置づけ、受け入れるようになっていく経過が理解される。子どもをとりまく大人達の子どもを中心とした「この子にとって今必要なこと」という視点でのかかわりの大切さが示唆される。これらの流れを追うと、主体である言語の発達を促す指導の前段階として、人とかかわりを優先課題とした母子への支援が、ひいては言語発達に効果的に作用したと言えよう。

かかわりは言うまでもなく相互作用的に成立するものである。従って、働きかける側と応答する側のいずれかが変化することで自ずと他方も変化を示すものである。その一つのきっかけが制約の少ない開放的な保育グループへの母子参加であることは否めない。その中で遊びや遊具への関心を高め、それらを媒介に人に関心をむけ、

やがては人とかかわりを求め、相手の行動を誘発したり待ったりしてやりとりを楽しむようになる。親和的な関係の成立は次のかかわり関係が期待できる点からも発展的である。また、かかわりの指導には子どもとの直接的な関係の促進と共に、母親への側面的な支援がその達成には大切な要因となる点が確認される。

人とかかわりが困難で言語発達の遅れた子どもの場合主体である言語の指導そのものへの直接的な指導は困難であり、むしろ快ち良いかかわりの中でコミュニケーションの手段としての言語使用の必要性を体得させていくことが先決である。言葉を使う必要性を子どもが感受すれば自ずと言語使用へと動機づけられていく。N子の場合一過性の言語遅滞とは異なるため、将来的にも母親に子どもの問題の認知を促し、その子の可能性を十分に伸ばしうる環境を設定することを日常的に行えるように支援することで効果が高められるのである。

VI おわりに

一事例をもとに、子どもを中心としたかかわりの過程について述べてきたが、言語的な交流の前段階として、子どもの要求に添った非言語的なかかわりを糸口にしていくことの大切さが実感される。言葉はまだ十分に機能を果たしているとは言難いが、コミュニケーションの手段としての役割を自覚する過程で、まず子どもが求める人と求める関係を築くことが基点となろう。かかわりの充実が発達上不可欠であり、諸側面の発達を助長する上の重要な要因である。身体表現などの前言語的行動あるいは表出言語以前の内的言語を大人は受けとめ、ことばの素地とし発展的に対応することが求められる。今回の子どもに焦点をあてたかかわり過程の結果をふまえて、今後は母親の変容の過程を検討することで、より効果的なかかわり関係の発達と保育者の援助体制について、検討をすすめていきたい。

参考文献

- 1) 村井則子, 村井憲男, 仁平義明, 足立智昭, 村上由則, 障害をもつ母親の異常の認知と育児の態度 日本教育心理学会28日大会論文集 P.1042-1043 1986

障害児保育における保育効果の研究(Ⅱ)

- 2) 岡宏子：親子関係の理論 岩崎学術出版 1990
- 3) 鈴木裕子, 金平文二, 後藤嘉余子, 芝辻益子, 上野
己美子：障害のある幼児の保育効果の研究 東京家
政大学研究記要第30集(1) 1990
- 4) 高橋哲郎：子どもの心と精神病理 岩崎学術出版社
1989
- 5) やまだようこ：ことばの前のことば 新曜社 1990